

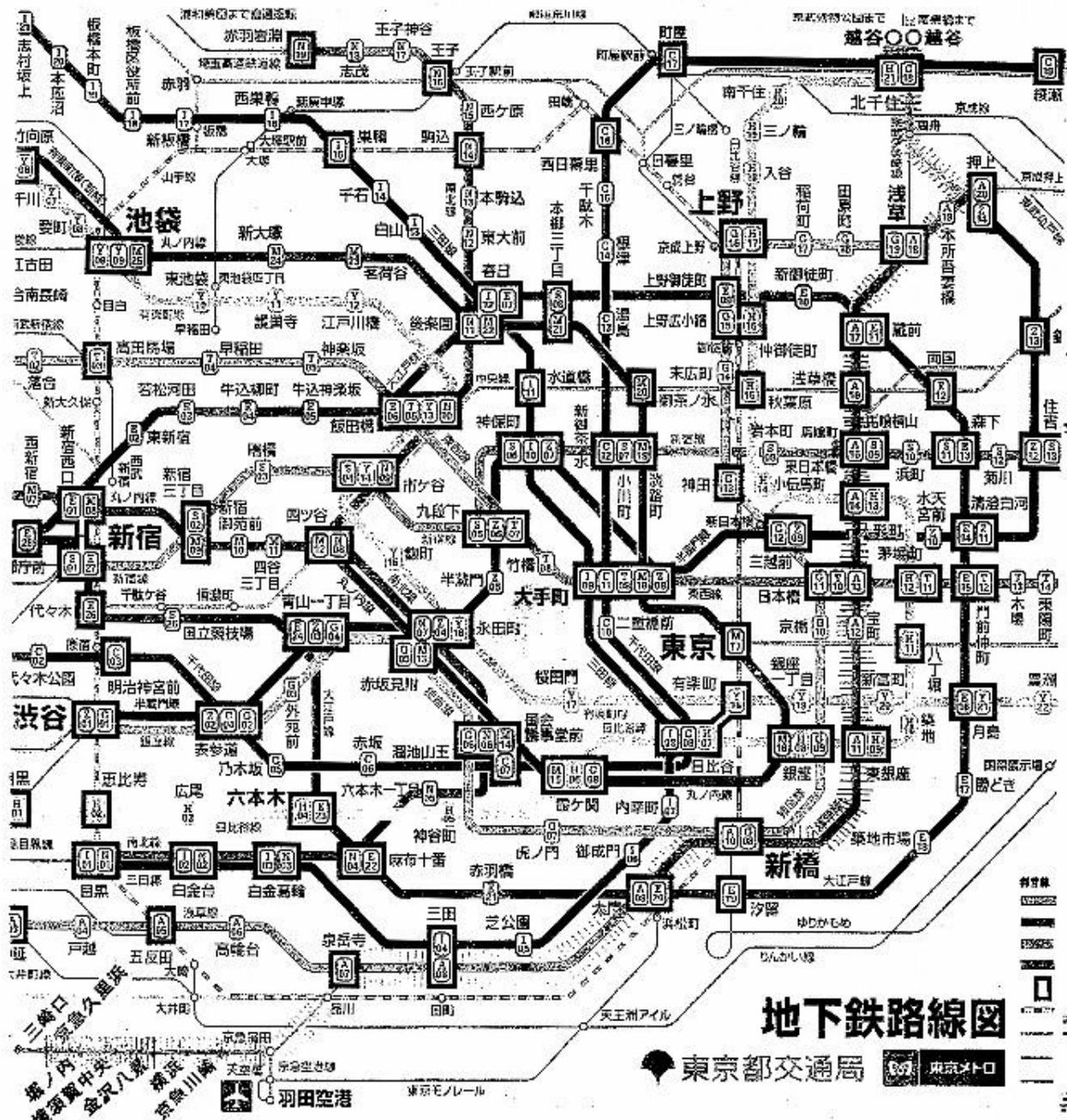
平成16年5月30日(日)

第三三〇回 史跡めぐり 資料

日本海海戦99年の三笠と

ペリー来航151年の久里浜

越谷市郷土研究会



地下鉄路線図

東京都交通局 東京メトロ

- ◎第330回 史跡めぐり 日本海海戦99年の三笠とペリー来航151年の久里浜
- 平成16年5月30日(日) 午前7時45分東武線・越谷駅前東口
- コース 越谷駅=押上駅=(都営・京急)=横須賀中央駅…三笠記念艦…横須賀中央駅=京急久里浜駅…ペリー上陸記念碑…開国橋=灯明堂入り口…灯明堂…紺屋町…常福寺庭園…西叶神社…紺屋町=京急久里浜駅=(京急・都営)=押上駅=越谷駅 <帰>
- 昼食 各自持参 ○参加費 4,000円(交通費・入鑑料など)
- ご案内 幹事長 宮川進



82 東郷長官、露艦隊を完全に屠る

露国増遣艦隊の来攻は、十分推察されたところであり、それを前提にわが分撃戦略が案出されたのである。露国政府が三十七年四月三十日、第二太平洋艦隊の編成を発表するや、連合艦隊はその来着までに露国旅順艦隊を撃滅することを至上命令として、百方手段を尽くして戦いやがて陸軍の旅順要塞攻略によって、十二月上旬にそれを實現することができた。一方、幸いなことに露国増遣艦隊の出発は著しく遅れ、加えてその行動は遅々として、旅順艦隊撃滅の時点において、露国第二太平洋艦隊はマダガスカル島にあつた。そのためわが連合艦隊は時間的余裕を持つことができ、その邀撃態勢を整えることができた。すなわち、旅順艦隊撃滅後、わが連合艦隊は少数の艦艇を旅順警備に当らせ、他はことごとく内地に帰投、修理や底洗いを行った上、鎮海湾に進出して訓練を励行、次の作戦に備え、戦略戦術を練り、戦策を定め、さらに

敵艦隊に対する監視、情報収集に努め、邀撃態勢の万全を期したのである。

大本営は四月七日、敵艦隊がマラッカ海峡通過の情報を得、さらに五月十四日、ヴァン・フオンにあつた敵艦隊が北方へ向かつたとの情報を東郷平八郎連合艦隊司令長官に通知した。東郷長官は四月十七日、敵艦隊が接近し、対馬海峡通過が殆んど確実な旨を、片岡第三艦隊司令長官に通知して南方に対する哨艦を増加するよう命じた。東郷長官は、五月二十六日までに敵艦隊を見なければ敵艦隊は日本の東方洋上を迂回したものと判断して、連合艦隊の北方移動も考慮に入れて待機した。二十七日四時五十分哨艦信濃丸は、二〇三地点（北緯三三度二〇分、東経一二八度二〇分）で、「敵第二艦隊見ゆ」と発信、これを受けて哨艦和泉は直ちに素敵に従事し、触接を保ちつつ刻々敵情を打電した。

この日東郷司令長官は、旗艦三笠に坐乗し、鎮海湾にあつたが、五時五分頃敵出現の報に接し、全軍に即時出動を命じ、第一、第二、第四戦隊、第一、第二、第三、第五駆逐隊（第四駆逐隊はこの日尾崎湾にあり、同湾を発して敵を求めて南下した）、第四、第一四、第一九艇

隊も順次抜錨した。同時に東郷司令長官は大本營に次の如く打電した。

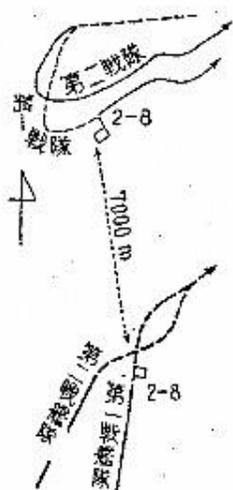
敵艦見ユトノ警報ニ接シ連合艦隊ハ直ニ出動之ヲ擊

滅セントス本日天氣晴朗ナレトモ浪高シ

東郷司令長官は刻々接受する情報により、敵の位置、針路、勢力、陣形を知り、これを沖の島付近に邀撃せんと決心した。十三時三十九分遙かに南西方に敵艦隊を望見し、十三時五十五分、東郷長官は旗艦三笠の檣頭高く次の信号旗（Z旗）を掲げた。

皇國ノ興廢此ノ一戦ニアリ各員一層奮勵努力セヨ

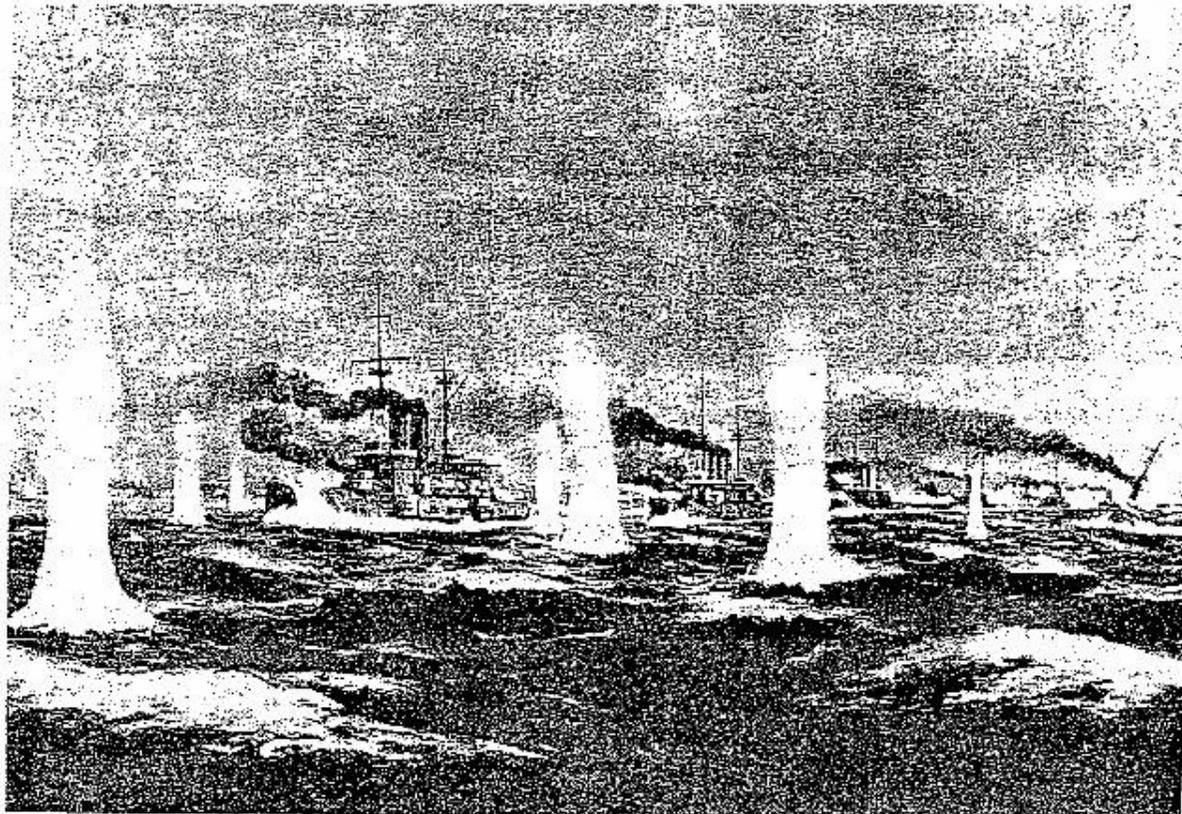
次いで十四時二分、わが主隊は南西微南に変針、先ず敵に対し反航の姿勢をとったが、同五分旗艦三笠は急に



舵を左に転じて東北東に変針第一、第二戦隊の各艦順次これに倣つて敵の先頭を圧迫した。この時敵

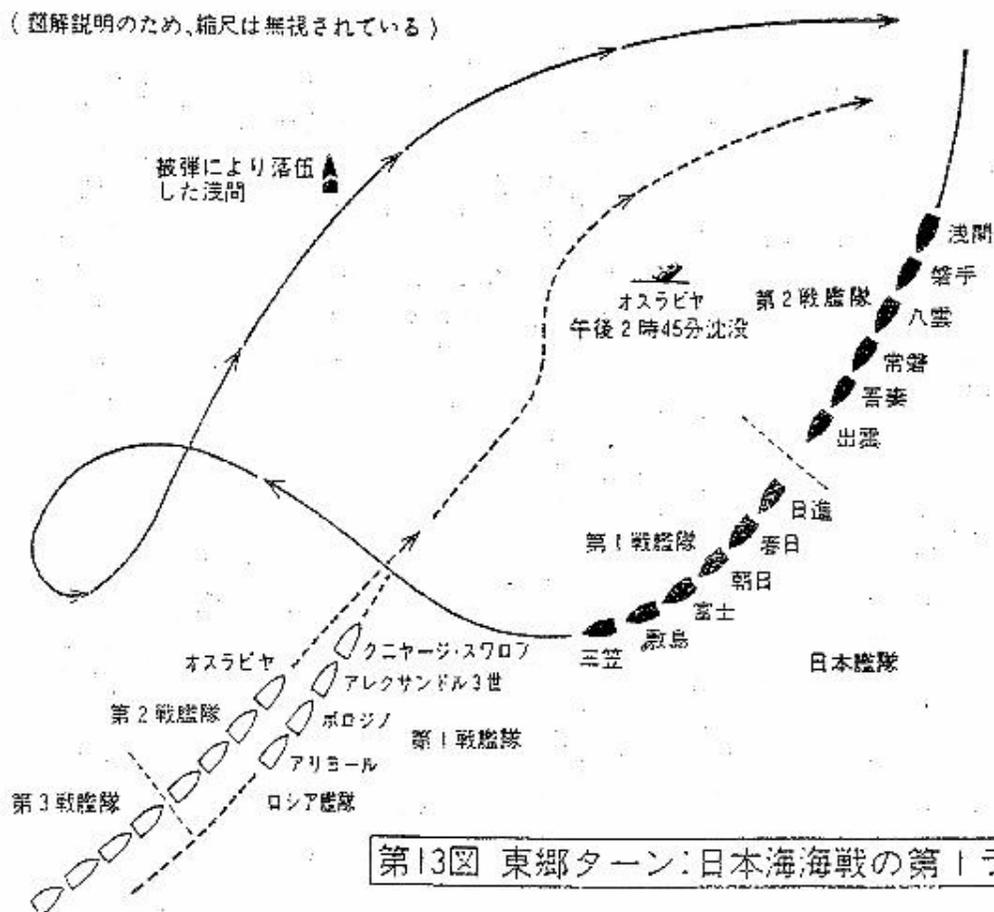
の先頭は三笠の南微東八千米で北東微北に進んでいたが、三笠の変針をみて好機到来と、旗艦スウォーローフ以下数艦が一時に砲火を開いた。しかしわが方はこれに應せず、

十四時十分距離六千米内外で、旗艦三笠始めて砲火を開き、諸艦これに倣い、先ず敵の両列の戦艦スウォーローフおよびオスラビアを猛撃した。このとき東郷長官が行つた緊急左反航の運動は一般に「東郷ターン」と呼ばれ、砲戦に有利な態勢である。「T字態勢」作為の戦術、すなわち「T字戦法」である。この結果オスラビア、スウォーローフ、アレクサンドル三世相次いで火災、以後虚々実々の戦闘が続き、日没までに前掲の三艦に戦艦ホロジノの計四隻の戦艦と三隻の特務艦を撃沈した。この大戦果は日本海海戦の全戦局を決定したのであるが、戦いはこれを第一回とし、同夜のわが駆逐隊、水雷艇隊を挙げた夜襲を第二回、翌二十八日に前後八回、合計一〇回の会戦が行われた。その結果バルチック艦隊三八隻中二〇隻撃沈、捕獲抑留等無力化一三隻に及び、浦塩運入は巡洋艦一隻、駆逐艦二隻で、特務艦中二隻が本国に帰投できたに過ぎず、名実共に東郷艦隊の完全勝利に帰した。この大戦果は何よりも露國皇帝を講和に踏切らしめ、日露戦争を日本の勝利の旗印のもとに終結させたことにおいてその意義は極めて大きい。

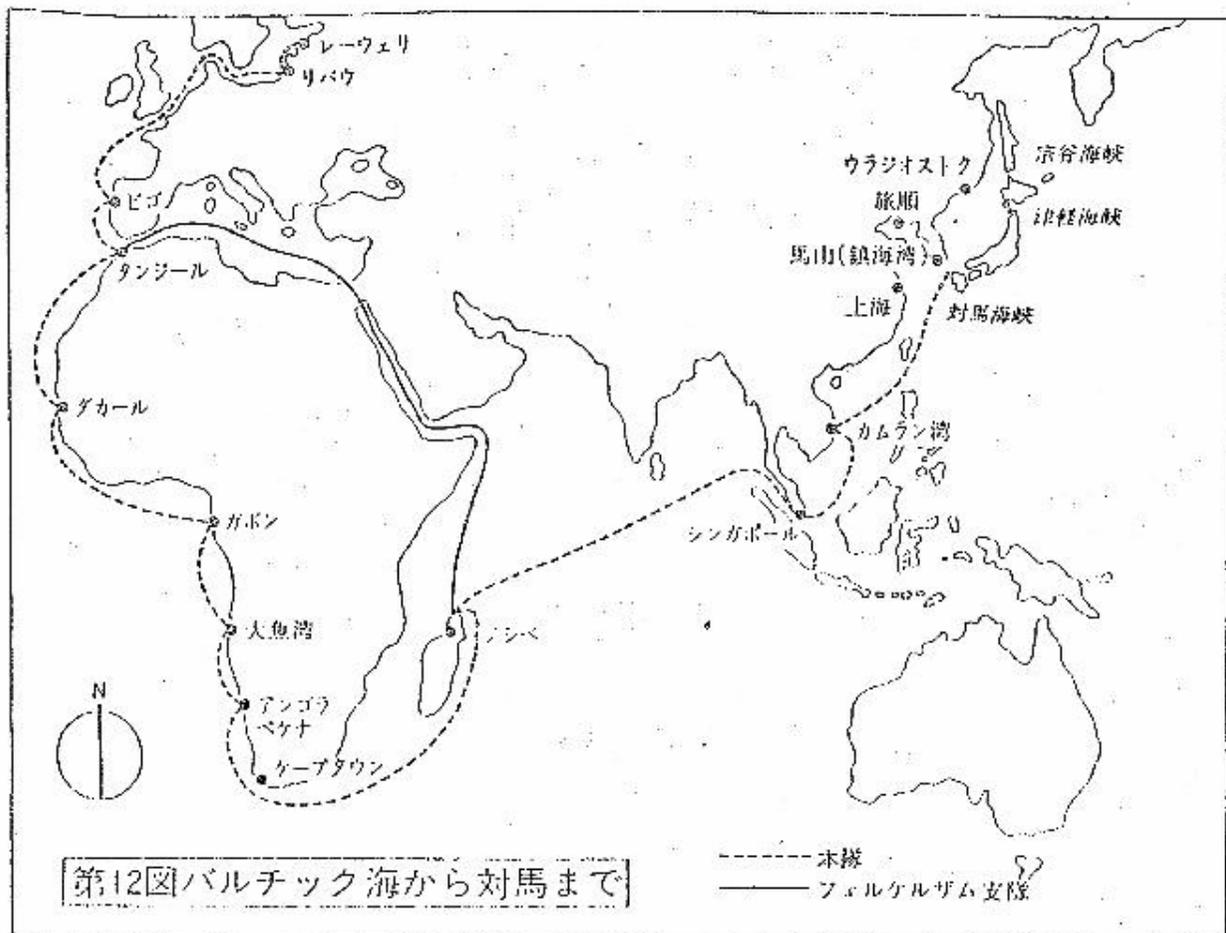


日本海海戦の図。一斉に砲撃の火ぶたをきった連合艦隊（先頭は旗艦三笠）

（図解説明のため、縮尺は無視されている）



第13図 東郷ターン：日本海海戦の第1ラウンド



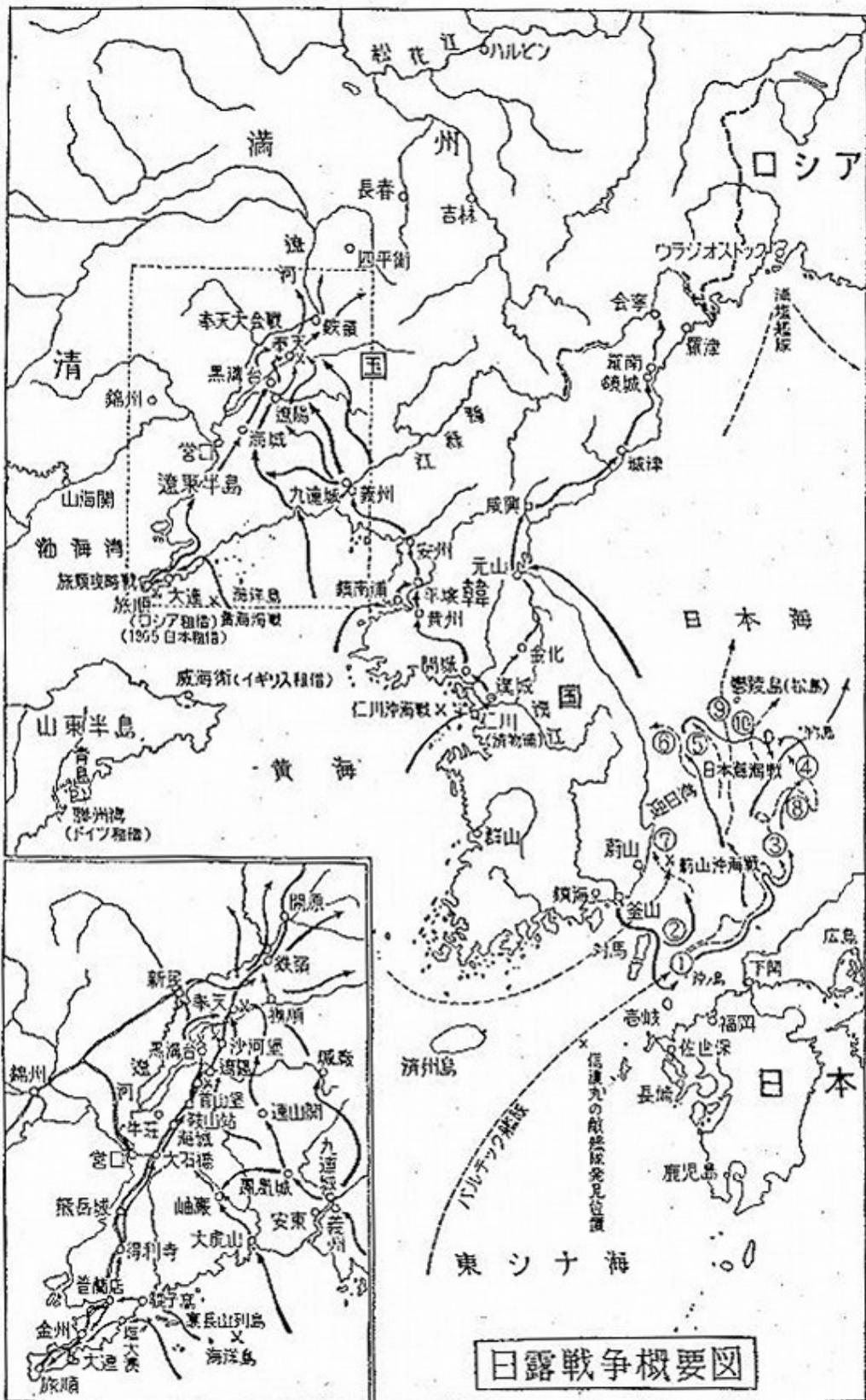
東郷平八郎

とうこうへいはちろう (一八四七—一九二一) 明治・大正期の海軍軍人。弘化四年二月二日生まれ。薩摩藩出身。初め仲五郎と称し、元服して平八郎と称す。薩英戦争に参加後、一八六六年(慶応二)薩摩藩の海軍に入る。戊辰戦争に薩摩藩の軍艦「春日」に士官として乗り組み、阿波沖で幕府艦「開陽」と戦う。この海戦は日本における歐式軍艦間の交戦の嚆矢になった。維新後の新海軍においては、七一年(明治四)四月から七八年五月までイギリス留学。七九年一二月海軍少佐、九四年六月「浪速」艦長になり日清戦争に出役。九八年五月に中将、一九〇三年(明治三六)一二月連合艦隊司令長官になり、翌年六月に大将。日露戦



東郷平八郎

争の日本海海戦(一九〇五)五月二十七日)、ロシアのバルチック艦隊を完破し、一躍世界的名声を得、東洋のネルソンと称された。一三年(大正二)四月元帥、翌年四月東宮御学問所総裁になり、昭和九年五月三〇日の死去の直前に侯爵となり、国葬で葬られた。(遠藤芳信)



日露戦争概要図

戦艦 - 艦隊 - 三 - 笠 - の - 略 - 歴

明治三一、九、二六
(一八九八)

明治三二、一、二三

明治三二、一、二四

明治三三、一、八

明治三四、一〇、一

明治三五、三、一

明治三五、五、一八

明治三五、七、二一

明治三五、一、五

明治三六、一、二、二六

明治三六、一、二、二八

明治三七、二、六

明治三七、八、一〇

明治三七、一、二、二五

明治三八、二、二二

明治三八、四、一八

明治三八、五、二七

明治三八、九、一一

第四号甲鉄艦を英国ビッカース・ソーンズ・アンド・マキシム会社に発注(価格八万ポンド)。

第四号甲鉄艦を「三笠」と命名。

起工。

進水。

本籍を舞鶴鎮守府と指定。

竣工(軍艦旗を掲揚)。

本邦へ向け英国プリマス発。

横須賀着。

常備艦隊に編入。

常備艦隊旗艦(司令長官、中将日高壯之丞)

中将東郷平八郎が常備艦隊司令長官に就任。

連合艦隊旗艦(司令長官、中将東郷平八郎)。

戦地に向け世佐保発。その後、旅順方面において敵艦隊の攻撃、閉塞隊の援護、港湾封鎖などの作戦に参加。

黄海海戦、旅順を脱出南下したロシア艦隊を黄海に迎え撃ち、七時間に及ぶ激戦を交えて大損害を与えた。三笠も被弾二十余个に達し、後部砲塔は破壊され、メインマストも倒れそうな損傷を受け、戦死二三名、負傷九二名の被害を蒙った。

呉に向け戦地(婁長山列島)発。旅順にあるロシア太平洋艦隊の主力艦全部の撃沈を確認した東郷司令長官は、戦況報告及び次期作戦打合せのため上京した。その後、翌年一月二日旅順が陥落し、日本艦隊の有力艦隊が修理のため内地に帰った。

鎮海湾に進出(江田島、佐世保経由)。ロシア本国からの増援兵力たる太平洋第二・第三艦隊(通称バルチック艦隊)との決戦に備えて、連合艦隊は射撃・発射・運動など各種の猛烈な訓練を開始した。

第二艦隊(司令長官、中将上村彦之丞)をもつて、ウラジオストク前面に機械水雷七一五個を敷設。ロシア増援艦隊が四月九日シンガポール沖通過との情報を得て、要撃作戦の最終段階完成に必要な機雷原を構成した。

東郷大将の率いる連合艦隊は、ロジエストウエンスキー中将の率いるロシア太平洋第二・第三艦隊(三八隻)を対馬沖に迎え撃ち、翌二八日にわたる数次の合戦により空前の大勝を収めた。

この海戦での三笠の被弾三十余个、戦死八名、負傷百五名。

正子過ぎに後部火薬庫に火災が発生し、佐世保まで二隻七。句讀三三三。

西暦 年号 天皇 将軍

国内事項

世界情勢

一八四五

弘化二

孝明

家定

3 アメリカ捕鯨船、漂流民を連れて浦賀に来航し、幕府、受け取る。5 イギリス船、琉球に来航し、通商を要求する。6 幕府、オランダに対し、開国の勧告を謝絶する。

上海にイギリス租界できる。

一八四六

三

孝明

家定

4 イギリス船・フランス船、琉球に来航し、通商を要求する。閏5 アメリカ東インド艦隊司令長官ピットル、浦賀に来航して、国交樹立を求める。

この年、アメリカ・メキシコ戦争始まる（一八四八）。

一八四七

四

孝明

家定

8 幕府、朝鮮通信使との通信を大坂で行うと発令。11 陸奥国南部藩三閉伊一揆（弘化三閉伊一揆）起きる。この年、痘瘡流行する。

アメリカ、カリフォルニアで砂金発見（ゴールドラッシュ）。

一八四八

嘉永元

孝明

家定

12 薩摩藩の調所広郷（73）密貿易の責任により自殺する。

一八五〇

三

孝明

家定

6 オランダ船、長崎に来航し、アメリカ・イギリス両国が通商の意志あることを報告する。10 肥前藩、反射炉の築造に着手する。高野長英自殺（47）。

この年、太平天国の戦い始まる（一八六四）。ロンドン大博覧会開かれる。

一八五一

四

孝明

家定

1 アメリカ船、中浜万次郎らを護送して、琉球に到着する。8 薩摩藩三島津斉彬、鹿児島に製煉所を設置する。

この年、イギリス・フランス連合して、ロシアに宣戦。クリミア戦争始まる（一八五六）。

一八五二

五

孝明

家定

6 オランダ商館長、アメリカ船来航計画を告げる。10 幕府、朝鮮通信使の来聘を延期する。

一八五三

六

孝明

家定

5 陸奥国南部藩で三閉伊一揆が起きる。6 アメリカペリー提督、浦賀に来航して、開国を要求し、大統領書簡を渡す。十二代将軍家慶（61）没する。7 幕府、徳川斉昭を海防参与に任命する。ロシア使節プチャーチン、長崎に来航する。8 ロシア、サハリン島クシュンコタンに兵營を築く。12 プチャーチン、長崎に再来する。

一八五四

安政元

孝明

家定

1 ペリー、神奈川沖に再来する。3 日米和親条約を締結し、下田・箱館の二港を開港する。閏7 イギリス・フランス連合艦隊、カムチャツカ半島のペトロバプロフスク要塞を攻撃、ロシア軍に撃退される。イギリス東インド艦隊司令長官スターリング、長崎に入港し、ロシアとの開戦を告げ、対応を求める。8 幕府、日英協約を結ぶ。11 東海大地震起きる。大津波でロシア艦大破する。12 幕府、日露和親条約を結ぶ。

一八五六

安政元

孝明

家定

イギリス・フランス連合して、ロシアに宣戦。クリミア戦争始まる（一八五六）。

一八五三年（嘉永六）六月三日、四隻の艦隊で浦賀に來航し、碇を降ろした。ペリーの旗艦サスケハナ号（二四五〇トン）に、浦賀奉行の与力中島三郎助が、番船を漕ぎよせた。オランダ通詞たちは、中央の帆柱に旗をかがけているのが「旗艦」だという。「外国の法」を知っており、まっすぐサスケハナ号に向かった。

日米最初の交渉の様子は、「對話書」に次のように記されている。「對話書」とは現場の応接掛や奉行が作成し、幕閣へ届けた外交交渉の公式史料で、現在は外務省外交史料館（東京都港区麻布台）に保存され、公開もされている。

三郎助「船は、何国の船にて、何らの訳これあり、当港へは、渡り来たりそうろうや」

アメリカ「船は、北アメリカ合衆国の船にて、本国首都、ワシントンより、大統領より日本国帝に呈しそうろう書簡、所持いたしそうろう。高官の者、乗り組みおりそうろうあいだ、日本の高官の人にこれなくては、応接あいなりがたくそうろう」

三郎助「日本の国法にて、これまでたびたび、異国船も渡来いたしそうらえども、高官の者、異国船へ乗り組み、応接いたしそうろう儀、一切これなく……」

ペリーは、国書（大統領書簡）をもっていることを理由に、「高官」との交渉を要求するが、日本側は、「高官」との応接は「日本の国法」に適わないと拒否する。もともと文明国相互の儀礼は、ヨーロッパではそれが原因で戦争が起こるほどの重大問題であった。「外交使節の儀礼」も国際法が取り決める事柄であり、それこそは、ヨーロッパに国際法を形成させる力のひとつであった。



ペリー「絵入りロンドン・ニュース」1853.5.7に、「合衆国の日本遠征」と題して肖像と記事が掲載された（横浜開港資料館所蔵）



浦賀のペリー艦隊 嘉永6年6月、初めて浦賀にやってきたペリー艦隊の図。蒸気船が2隻と正確である。

アメリカ大統領国書の要約

そして嘉永六年（一八五二）ペリー艦隊が日本に来るのである。ペリーは艦隊を浦賀沖に停泊させたまま、アメリカ大統領からの国書を「上陸して直接渡したい」と幕府に強く要求した。それが実現するのは、米航からわずか六日後の六月九日のことであった。これだけ短期間に実現したのは、ペリーの武力を背景にした強力な圧力のせいでもあるが、幕府側が、事前に情報をつくれ、心の準備ができていたためでもあった。

大統領国書の内容は、日本側の通商アメリカ人船員や海運士の日本での保護、そのための条約の締結、といったものであった。

「国書への回答を、米使に、再び江戸湾に原るときまで待つ」と、こういい残して、ペリーはいったん日本を離れる。幕府は、期限ついで大きな前題を背負わされてしまった。

結局ペリーは、それからじか月経前にも陪する艦隊を率いて再来日するわけであるが、日本ではこのあいだに、一大外交論議が繰り広げられていたのである。

「邊政彙編」にみられる意見

時のど中は、何部正慮であった。

何部は大統領国書を、大名から一部の庶民に至るまで広く回覧させた。そしてかれらから広く意見を求めたのである。幕府が政策の決定に意見を募って反映させるという、民主主義にも通ずるような前代未聞の筆を打ったのである。

その回答は、「邊政文議」という書物にまとめられて、七一九通残っている。それらのうち、代表的なものを要約してみよう。

大名からは、「一五〇の回答が寄せられている。新水戸藩主の徳川齊昭は、無礼をアメリカに相を譲じてはならない。徹底的に攘夷の大号令をかけ、国威をあげて戦うべきである。しかも、オランダとは交易を続けながら国りを養うべきだ」と主張した。

薩摩藩主の島津齊彬からは、「アメリカとの交易は三年間待つべし。そのあいだに実力をつけて、そして戦もどいよいよ、いろいろなことも決めればよい」という意見を述べた。

幕府からは四一三の回答が残っている。そのなかの代表として、小井清組の膳所太郎は、「わが国は開国するべきである。貿易を盛んに行って、富国強兵を果たす」とした。



高橋清政 24歳

長州藩士。来航のうわさを前年から知っていた松陰は、象山のあとを追ひ、5日夜、浦賀に到着。6日朝、高台から黒船4隻のようすをうかがう。黒船までの距離、大砲などの兵力を分析し、「日本の武士がふんどしを締めたおとどきが来た」と、江戸の長州藩士に書簡を送っている。1859年、「安政の大獄」で刑死(30歳)

嘉永六年六月三日



嘉永六年(一八五三)六月三日、夕方の静けさを一変させる日本史上類のない重大事件が起こった。アメリカ東インド艦隊の司令長官ペリー率いる巨大な「黒船」四隻が、江戸の玄関口浦賀沖に乗りこんできたのである。

前年、幕府はこのことを知らされていた。また、有識者の何人かは、この日が来ることをすでに予想していた。しかし、幕府は具体的な対策を講じえなかった。逆に、政治から遠ざかっていた諸大名や下級武士たちが、積極的に行動を始める。まさに、さまざまな人物が活躍・行動する幕末激動時代の扉が開かれたのであった。

佐久間象山 43歳

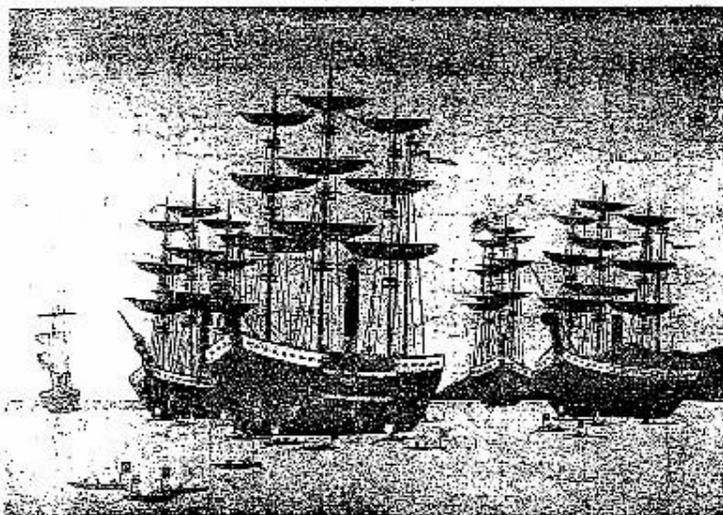


幕代藩士。門弟数人と4日夜、浦賀に到着。以前より海防家を見ていたが、聞き入れられなかった象山は、ペリー艦隊を見て悲憤慷慨した。松陰らと議論を交わし、「海防が手薄な状態では、陸上で戦闘に及ぶしか手段はない」と豪語した。1864年、京都・三条木屋町で相殺(54歳)

桂小五郎 40歳



長州藩士。江戸の練兵館で剣術修行中の桂は、4日夕、黒船のうわさを聞き、5日夜すぐにも浦賀に直行しようとするが、急用のため果たせなかった。7日、江戸郊外の大森警備に参加。これを機に、江川英竜に師事し、砲術を学んでいく。1877年、病死(45歳)



坂本竜馬 19歳



土佐藩士。江戸橋町の千歳道場で剣術修行中の坂本は、この年の9月23日、土佐の父親に書簡を送っている。「外国船が来たので、戦争は間近だろう。そのときは、外人の首を持って帰国したい」。のちに海援隊を結成し、海運・貿易に従事する坂本も、このときは血気さかんな青年将士であった。1867年、京都・近江屋で暗殺(33歳)



高杉晋作 15歳

長州藩士。天保10年(1839)生まれの晋作は、いまだ世に出ることはなく、この年に元服して、ようやく一人前の武士となったばかり。これ以後、吉田松陰の松下村塾に入門し、長州藩における尊皇攘夷の指導的役割を果たしていく。1867年、病死(29歳)



福沢諭吉 20歳

中津藩士。幼少のころから人々が話す時勢論や徳川斉昭のうわさを聞いていたが、このときはまだ政治意識にめざめていない。翌文政元年(1854)、蘭学修業のため長崎に出かける。後年、福沢は、このときが「私の活動の始まり」であったとしている。1901年、没(58歳)



孝明天皇 28歳

武家伝承からペリー来航の報を受けた天皇は、即日社寺に対して17日間の「凶滿解送」「万民安符」の祈禱をさせ、みずからは修行(仏道修行)をおこなった。外国人を極端に嫌っていた天皇は、以後も美談同様の折衝をさせている。

1856年、病死(36歳)



徳川家定 28歳

公家。公家の墮落した生活に不満をおぼえ、この年の1月から朝白殿面政通の歌道の弟子となっていた岩倉は、「外交を幕府に委任するのではなく、朝廷が主体となっておこなうべきだ」という意見書を閣司間白に提出。朝廷改革も主張し、以後、「王政復古」の実現に努めていく。

1883年、病死(59歳)



徳川實政 17歳

一橋家当主。ペリー来航後の7月5日、老中の求めに応じて、アメリカ国書への意見書を幕府に提出する。アメリカとの通商は拒否すべきとし、もし戦争となっても、皇国の「御威光」で勝利はまちがいないが、防備は慎重にすべきと説く。

1913年、没(77歳)



徳川実勝 30歳

尾張藩主。島津斉彬などから来航情報入手していた慶勝は、阿部正弘に正式な情報伝達を求め、幕府への対外建白活動にかかわった。実際にペリーが現れてからは、鎖国体制を維持するため、アメリカの開国要求を断るべきだとする意見書を幕府に提出した。

1883年、没(60歳)



徳川家定 36歳

老中。長崎経由のオランダ風説書などで、あらかじめ情報をキャッチしていた阿部は、島津斉彬をはじめとする有力大名と対策を講じていた。来航後は、7月に諸大名や幕臣にアメリカの国書を提示し、対外問題について意見を求めた。

1857年、病死(39歳)



徳川家定 36歳

前水戸藩主。前年、徳川慶勝より来航情報を入手していたが、5日、阿部正弘からペリー艦隊への処置について詰問を受けた際は、「今さらどうしようもない」とし、特に動いた形跡は見られない。しかし、将軍家慶の強い意志により、7月3日、幕政に参画した。

1860年、病死(61歳)



徳川実政 27歳

薩摩藩士。前年、西郷は祖父、父、母をつつげさまに失った。仲間藩士たちは、江戸に活版の場を求めていたが、西郷は代々住んでいた家を手放し、借家を探さなければならない。のちの討幕派リーダーも、このときばかりは政治問題どころではなかった。

1877年、西南戦争で自刃(51歳)



島津忠久 45歳

薩摩藩主。阿部正弘や長崎から情報を得ていた齊彬は、ペリー来航に先立ち、江戸在住の子女の遊離場所やその方法を考えたのち、薩摩へ向け江戸を出立する。帰郷途中の5月29日、琉球にペリーが来航したことを知り、江戸家老に密書を送り、浦賀を内偵するよう指示した。

1856年、参進(50歳)



勝海舟 51歳

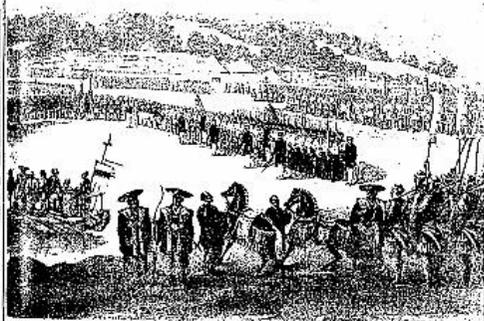
幕臣。当時、小笠原組の海舟は阿部正弘の預言に答えて、7月12日付で建白書を提出する。幕府内の「人材委用」と「善後洞開」が必要と説き、さらに船をつくってロシア・中国・朝鮮などと積極的に交易し、その利益を海防の費用にあてるべきと主張した。

1860年、没(77歳)

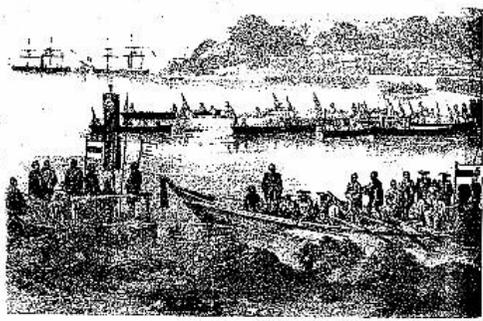


巴ペリー来航 嘉永6年に来航したペリー艦隊は、翌年1月に再び来航し、3月に日米和親条約を締結する。これは再来航時のもので、蒸気船ポーハタン(2415トン)を旗艦に、サスケハナ(2450トン)、ミシシッピー(1892トン)、マクドニアン(1341トン)、パンダリア(770トン)などを従えていた。

ハイネ（ペリー）著 公田正上 監
 年（一八五三） 横濱 藤澤洋行 刊



この絵は、ペリーが日本に始めて上陸した日の光景。嘉永六年（一八五三）六月の久里浜である。翌年二度目の来航で、横浜に上陸する絵は三回目に掲出した。ふたつを見比べてみると、共通点があることに気がつく。
 かがやく陽光、高くぬけた空、広い海岸線、毅然とした士官や将官、水兵の隊列、ひるがえるアメリカ国旗と提督旗、ひとまわ威厳をもって歩くペリー提督。あくまでも強い国アメリカ、国威を強調した同様の作風である。
 絵の作者は艦隊の随行画家ペー



ター・ベルンハルト・ウイヘルム・ハイネ、ドイツの人である。
 一八二七年ドレスデン生まれ。ドレスデンの王立美術学校で美術と建築を学びパリに逃した後、帰国したが革命が起こり、アメリカに新天地を求めた。
 ある日、ペリーの知遇を得て日本遠征に参加を希望。技量をみとめられ、絵で記録せよと命じられた。一八五二年、艦隊とともに出発した。

浦賀沖に到着、「この湾の眺めは実に見事で、ハイネ氏は海辺と酒買の下手を素材にして一枚描きあげた」と、ウイリアムズは「ペリー日本遠征随行記」に書いている。仕事熱心な人だったのだから、二度目の乗航にも随行。



きれいに整備された浦賀の灯明台

二世紀灯し続けた灯明台

江戸に幕府が置かれ、政治・経済の中心が東へ移行すると、京都を中心とした上方から多くの物資が運ばれるようになった。

当時の輸送手段の主流は水運で、大量の物資を高速で輸送する「樽廻船」「菱垣廻船」と呼ばれる船団が、江戸と大阪の間を行き来するようになった。

しかし、当時の航海技術は至って未熟なもので、陸地を片方に見ながら、潮と風が頼りの航海術でしかなかったため、海難事故も多く、特に江戸の入口に当たる浦賀では、上方や東北からの船の「風待ち」や「潮待ち」のため、湊への出入りが頻繁で、事故も多発していた。

そこで、幕府は海運需要の高まりに対応して、海上安全を図るための施設整備に迫られ、西浦賀の海岸先に「灯明台」を

設置したのである。

「灯明台」とは現在の灯台のことで、複雑な浦賀周辺の海岸線の位置を示し、出入りする船を安全に導くため、慶安元年（一六四八）に建設された。

当初、灯火費用は幕府の負担であったが、途中からは、地元浦賀の営業権保護の名目で、当時数多かつた干鰯問屋たちが点灯費用を負担する役目を請け負うことになり、明治五年（一八七二）に廃止されるまでの二世紀にわたり、灯し続けられてきたのである。

近年まで、浦賀の「灯明台」は石積みしか残っておらず、わが国最初の洋式の観音崎灯台に隠れて影も薄かったが、昭和六十三年（一九八八）に江戸時代の絵や図面をもとに復元され、新しい光を沖行く船に投げかけている。

常福寺庭園

▶横須賀市西浦賀2-5 (→p. 173, 177)

▶京浜急行浦賀駅バス久里浜駅行紺屋町下車5分

バス停より久里浜方向へ歩いて行くと、左側の樹木の陰に常福寺の門柱が見える。放光山延寿院常福寺(浄土宗)である。寺伝では文明年間(1469~87)に鎌倉光明寺第6世順善了惠大僧正の弟子円蓮社教普上人の開創という。1720(享保5)年浦賀奉行所が設置されて以来、奉行所の御用寺院となり、代々の浦賀奉行の勤番交代(事務引継)が行なわれた。1882(明治15)年の火災により江戸時代初期の建築である閻魔堂以外は焼失した。現在の本堂は、かつて藤沢の龍口寺のもので、鎌倉の本覚寺を経て、1920(大正9)年に、ここに移されたという、室町時代後期の建築である。

庫裡の奥には、享保年間(1716~36)、当時の檀家であっ

た浦賀の有名な廻船問屋^{けせんや}気仙屋長七が、私財を投じて築造したという庭園が見事だ。書院庭園の一つである^{つみやま}築山泉水庭で背後の愛宕山の自然を借景としてつくられている。

境内の墓地には、浦賀奉行所の与力^{ごうりき}合原雄左衛門や佐々倉安左衛門ら奉行所の与力・同心の墓が多い。また、浦賀の遊廓(浦賀では洗濯屋と呼ぶ)の主人で『近世浦賀崎人伝』(浦賀の江戸時代の有名人の伝記)にもでてい

江戶屋半五郎の墓もここにある。



遊女屋から一衣一鉢の僧侶となった

江戸屋半五郎の生涯

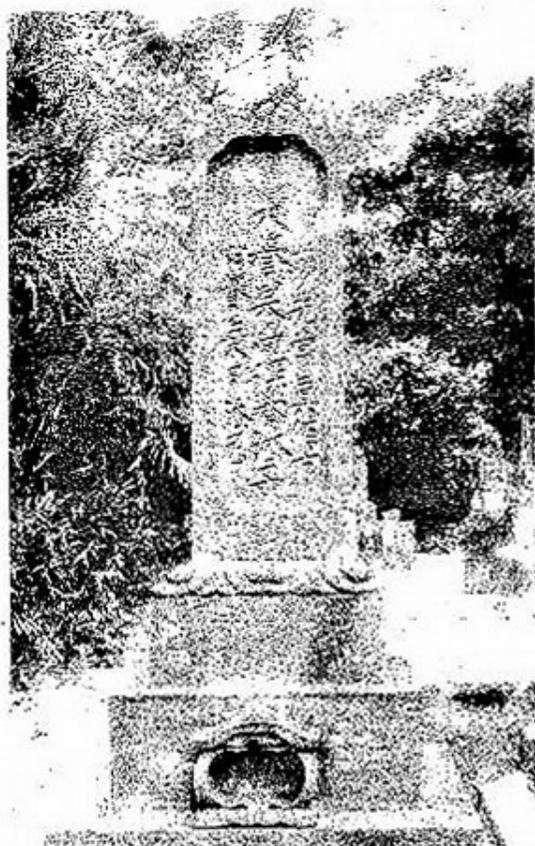
横須賀市西浦賀 常福寺

江戸時代の中頃、浦賀に番所が設けられてから、各地から出入りする船給の数も多くなり、その舟乗りたちが集って浦賀は賑やかな港町となった。

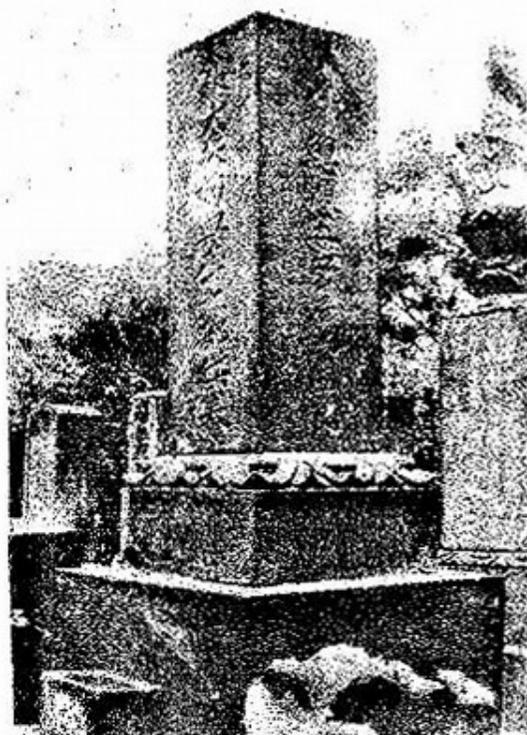
こうして必然的な施設として遊女屋が発展した。しかし、その出願は遊女屋ではなく、洗濯屋という旅人宿で、浦賀が繁栄するにつれて洗濯屋の数も増し、天明八年頃には和泉屋、江戸屋、亀屋、鶴屋などの四樓の店があり、なかなかの繁昌ぶりであったという。

なかでもこれら遊女屋の江戸屋の主人、江戸屋半五郎は任侠豪傑の人として知られ、洗濯屋稼業で資沢の仕放題の生活をしていた。或る日、半五郎は江戸にのぼり一人の旅僧に出会い、その説教を聞いてからは、世の中の無常迅速なることを悟り浦賀に帰って来た。半五郎は我が家に帰ると早速遊女たちを集めて金を配り、稼業を閉じることを話して、女たちを解放してしまったのである。

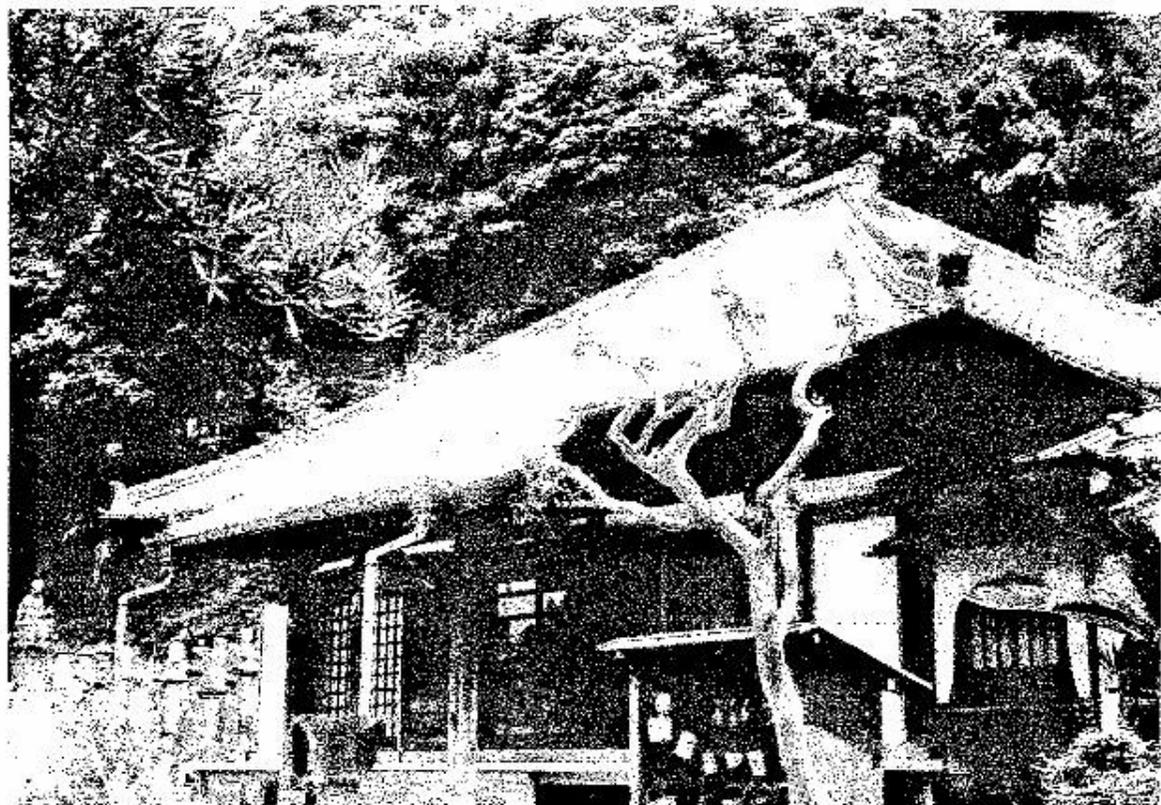
その後、財産を処分して遊女屋を廃業し、一衣一鉢の僧侶となった。



常福寺にある江戸屋半五郎の墓



江戸家半五郎が造立した六十六部供養塔



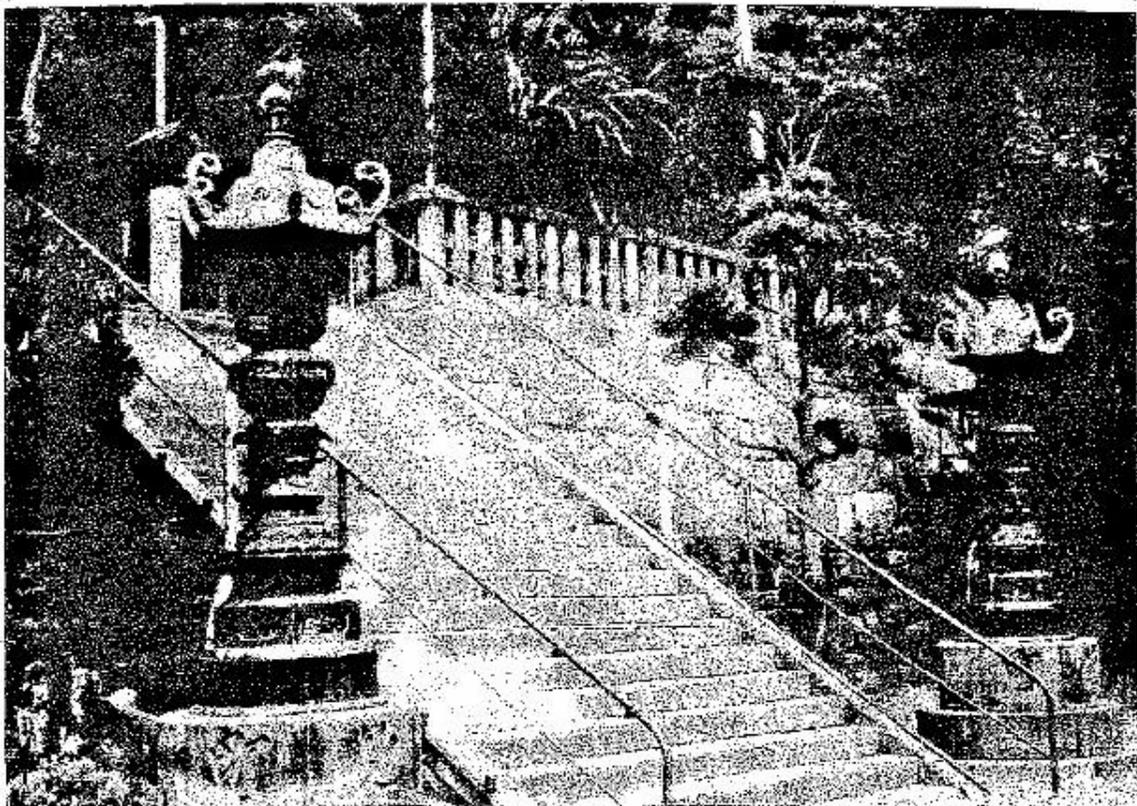
幕府の御用寺院として歴代の奉行職が勤めた香華院跡という常福寺本堂



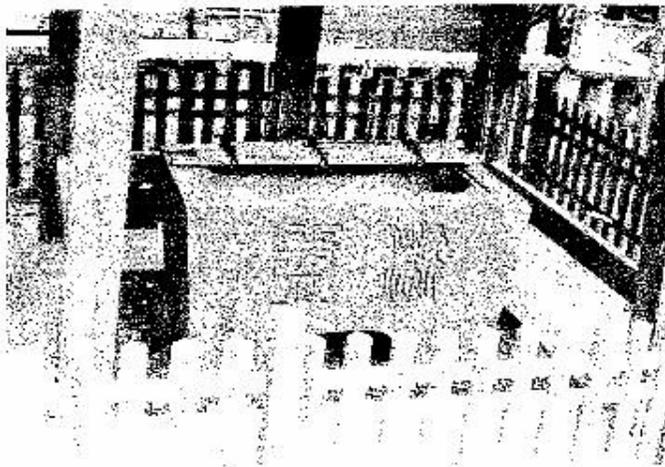
回船問屋の気仙屋長七が私財を校じて造ったという常福寺の庭園

て、京都黒谷の御坊の門をたたいて、名を深心と改め仏門に入った。こうして半五郎は遊行僧となつて諸国をめぐり歩くうちに、紀伊国で念仏行者、徳本上人と会い、師の契りを結んで名を「深本」と改め、徳本上人の教を受けて浦賀に帰つて来た。

やがて蟹田橋のもとに草庵を結び、念仏三昧の日を送り、時には村々を訪れて、住民の家々を廻つては念仏の布教につとめていたが文化六年（一八〇九）四月十九日、眠るが如く六十一歳の波瀾に



江戸屋半五郎が寄進したという銅製灯笼
と手洗石(左) (西叶神社)



富んだ生涯を終わったのである。

いま、西浦賀の常福寺の墓地の中には、「大昔果向深本法子」とい
う江戸屋半五郎の豪壮な墓と、その側には「奉納大乘妙典六十六部
供養」横に「総願主江戸屋半五郎事、深心法子」と刻んだ供養塔が
ある。

また、西叶神社境内には江戸屋の寄進による燈籠や、重剛な手洗
石などが遺され、遊女屋繁栄時代の一面を、かいま見ることができ
る。

洗濯屋という旅人宿の遊女話も浦賀奉行の廃止となった頃から静
まって、かつては栄華を極めた
浦賀の遊女屋も、人の世の栄枯
盛衰とともに昔がたりとなり、
江戸屋半五郎も里人たちの哀惜
の涙に包まれて、淋しい生涯を
終ったのである。



にしかのう
西叶神社

▶横須賀市西浦賀1-29 (→[圖 p.173, 177](#))

▶京浜急行浦賀駅バス久里浜駅行こくらまへ紺屋町下車5分

バスを降りると山側に真直ぐにのびた参道があり、両脇に大鳥居が立っている。この参道の奥に西叶神社がある。このあたりには大きな倉が残っていて、江戸時代に廻船問屋でにぎわった町の様子をしのぶことができる。西叶神社は、祭神は応神天皇で、社伝では、1181(養和元)年、京都神護寺の文覚上人が御神霊を石清水八幡宮より勧請したと伝える。また治承年間(1177~81)に源頼朝が源氏再興を石清水八幡宮に祈願し、願いが叶った時は適地に一社を建立



西叶神社

するという願をかけ、見事に大願成就したので、1186(文治2)年、叶大明神と命名し、ここに創建したとも伝える。

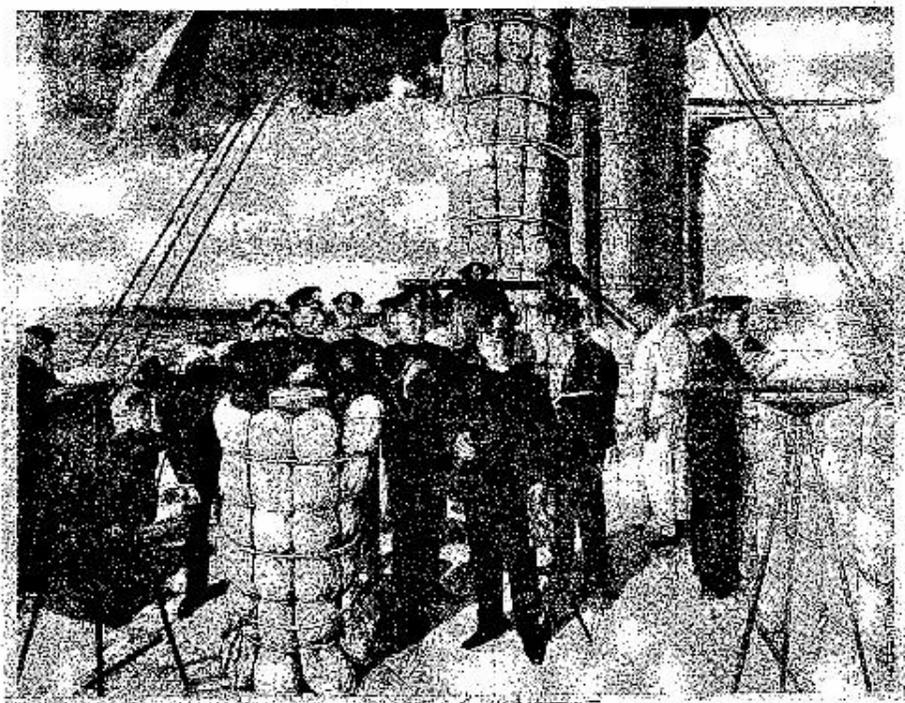
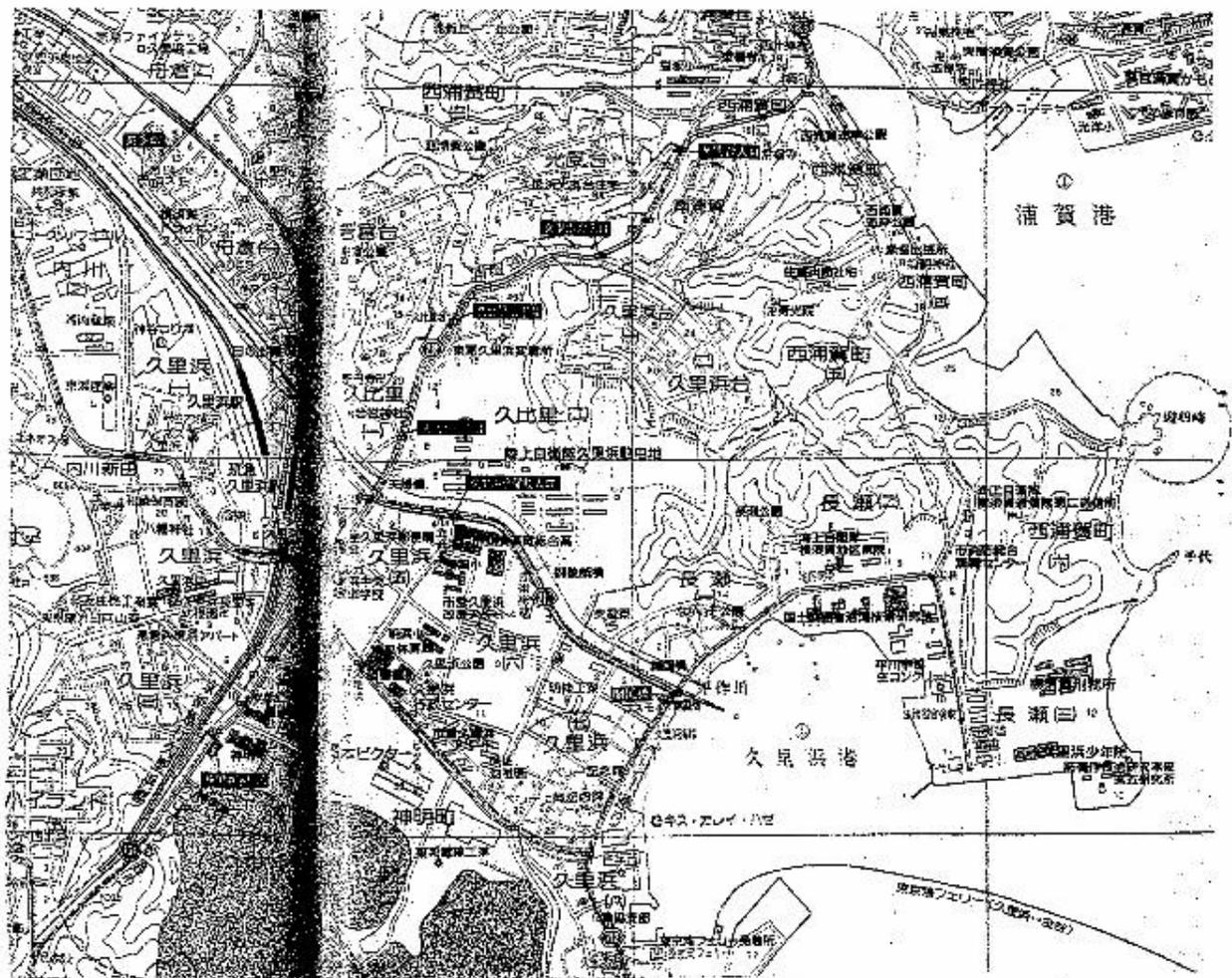
以来、港として栄えた浦賀の鎮守として地元の人々や港に出入りする人々の厚い信仰を得てきた。

しかし、1837(天保

8)年、浦賀の大火により建物は焼失してしまった。現在のものは、1842(天保13)年に再建されたものである。

この神社の本殿と幣殿は総ひのき造で、拝殿は総けやき造である。その内部は漆による彩色があり、花鳥草木の透し彫りの74面の格天井は、実に華麗ですばらしい。この制作には江戸後期の彫刻師後藤利兵衛があたった。これらの再建には7年の歳月と3000両を要したという。この費用は、浦賀の問屋衆の協力によったといい、これからも当時の浦賀の商人たちの大きな経済力がうかがえる。

また、石段の登り口には、浦賀の遊廓の主人たちが奉納した唐金の燈籠が、右手には江戸屋半五郎の寄進した手洗石がある。



◎参考書

- 神奈川県歴史散歩(上) 神奈川県高等学校教科研究会社会科歴史分科会編 山川出版社刊 96.5
- 日本の歴史18 開国と幕末変革 井上勝生著 講談社刊 02.5
- 歴史誕生2 NHK歴史誕生取材班編 角川書店刊 H2.2
- 絵とき横浜ものがたり 宮野力哉著 東京堂出版刊 H13.9
- 横須賀と海軍 吉富明治著刊 H11
- ビジュアルワイド江戸時代館 竹内誠監修 小学館刊 02.12
- 三浦半島の史跡と伝説 松浦豊著 暁印書館刊 S60.9
- よこすか一芥物語 よこすか未来塾編・刊 H7.2
- ロシアはなぜ敗れたか R・M・ナフツィン 藤村規 新人物往来社刊 89.12
- 記念艦みかさ (財)三笠保存会
- 国史大辞典 吉川弘文館刊 S58.2
- 日本史小百科・海軍 外山三郎著 近藤出版社刊 H3
- 日本大百科全書 小学館刊 S60.11